

科学とアートの祭典 2022秋

演劇公演

劇団青年団

ユラウ

こことは一体どこで、
わたしたちはどこへ向かっていくのか。

サンゴ礁は、ドラマだ。 喜界島の人とサンゴの語りをもとにした不思議な物語

16:30 開場

オープニングライブ 土岐宏大

17:00 開演

18:00 終演

アフターディスカッション

10月15日(土)・16(日)

旧坂嶺小学校校庭

入場無料

お問合せはLINEから！



青年団

劇作家・平田オリザ氏を中心に1982年に結成された劇団。平田氏が提唱した「現代口語演劇理論」を通じて新しい演劇様式を追求し、90年代以降のわが国の演劇シーンに多大な影響をあたえる。東京のこまばアゴラ劇場を拠点に、多彩な国際交流企画や海外ツアーも精力的に行っている。



宮崎玲奈 劇作家・演出家

1996年9月、高知県土佐市出身。明治大学文学部文学科在学中に、演劇学校無隣館に通い、2017年ムニを旗揚げ、2019年青年団演出部入団。ムニでは全作品の作・演出を行う。見ること、演じること、について批評的な創作アプローチを続ける。複数のシーンをつなぎ合わせていく、日常会話を基調とした3場以上の空間と時間を同時進行させる演出手法で注目され、第11回せんがわ劇場演劇コンクールにて、ムニ『真昼森を抜ける』で演出家賞受賞。作劇は「小説的」とも評され、大学卒業制作の『須磨浦旅行譚』が令和元年度北海道戯曲賞最終候補。



山下恵実 演出家・振付家

1998年生まれ。演出家/振付家。ひとごと。主宰、青年団演出部所属。埼玉県立芸術総合高校 舞台芸術科 卒業。高校在学中にクラシックバレエ、コンテンポラリーダンス、日本舞踊などを学ぶ。演劇作品やダンス作品の創作の他、俳優や一般市民向けWS、小学校でのダンスWSを行うなど、幅広く活動。横浜ダンスコレクション2020コンペティションIIファイナリスト。



オープニングライブ 土岐宏大

喜界島在住
シンガーソングライター

ガジュマルの木の下で、何かを待っている人が一人。

行ってほしくない人、行ってしまう人、忘れる人、忘れたくない人。

待っている人は、今いる場所の話をはじめめるが、

それは今の話かどうか、定かではない。

こことは一体どこで、わたしたちはどこへ向かっていくのか。

私たちは異分野の研究者間のコミュニケーションや、研究成果の地域への還元に『演劇』の手法を用いる試みを行っています。

これまで、劇作家として著名な平田オリザ氏を監修に、研究者、大学生、地域住民の方々など様々なバックグラウンドをもつ人々が協力しあい、演劇を一から制作。過去には、喜界島、札幌、鹿児島にて上演を行い、科学とアートの融合について取り組んできました。

今年の8月には研究者や演出家、建築家など多様な専門家が喜界島で合同フィールドワークを実施し、島民への聞き取り調査を元に、各分野の視点から島の学術的、文化的価値について議論をしました。

今回、二度目となる喜界島公演では青年団の、劇作家・宮崎玲奈氏、演出家・山下恵実氏と共に、フィールドワークの結果をもとに新しい演劇を制作しました。

本イベントはこのような島での取り組み、および成果を地域の方々に還元するために行います。地域住民と研究者、さらには地域に関連する様々なステークホルダーと共に、未来に向けて対話をする場を創ります。

SceNEプロジェクト

本公演はSceNEプロジェクトにより制作されました。

地球環境変動の影響が顕著になる中で、近年の経済発展や人口増加、グローバル化による生活様式の一元化によって、社会は気候変化や環境事象に対してさらに脆弱になっている可能性があります。

地球規模の気候変動と突発的災害の発生は、現在の地域社会が形成される過程において、人の思考と行動に大きなインパクトを与えてきました。その過程には外的、内的な要因により維持された知（在来知）が存在し、現代の我々が将来起こりうる未曾有の環境変動を乗り越えるにあたり選択肢となり得ます。

SceNEプロジェクトでは科学的知見に基づいて地域における在来知を再評価し、さらに共感を得やすい地域社会像を得るためにアートを取り入れながら、地域と人類の未来集合知の創造を目指しています。

作 宮崎玲奈 演出 山下恵実 出演 根本江理／南波圭／林ちゑ／伊藤拓
主催 総合地球環境学研究所 共催 喜界島サンゴ礁科学研究所 後援 喜界町